

I 研究主題

実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成
～エージェンシーを発揮し、生徒自身がデザインした探究的な学びを通して～

II 主題設定の理由

1 研究の経緯

1.1 主題設定の背景

2030 年代の未来には、より VUCA（予測困難で不確実、複雑で曖昧）な時代になると言われている。OECD（経済開発協力機構）では、そのような時代背景を踏まえて OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクトにおいて「OECD ラーニング・コンパス 2030」（以下ラーニング・コンパス）という名称のレポートを発表している。OECD は、「ラーニング・コンパスは幅広い教育の目標を支え『私たちが実現したい未来』、すなわち個人及び集団としてのウェルビーイングの実現に進んでいくための方向性を示すものである」と述べている。つまり、「ラーニング・コンパス」は VUCA な時代においても、生徒が自身の「実現したい未来」に向けて進んでいくための指針となっていくことがわかる。指針となる「ラーニング・コンパス」には、「エージェンシー」「AAR サイクル」「変革をもたらすコンピテンシー」や目標としての「2030 年のウェルビーイング」が示されている。

特に「エージェンシー」については、「ラーニング・コンパス」において中核的概念として扱われており、世界で統一された定義がないとしながらも、「誰かの行動の結果を受け止めることよりも、自分で行動することである」や「自分たちが実現したい未来を、自分で考えて目標を設定し、必要な変化を実現するために行動に移していくこと」と示されている。また、OECD の議論を踏まえて、白井（2020）は「エージェンシー」の概念には「責任」の意識が重視されていることを指摘している。ここで述べられた「責任」とは、自分たちが属する社会に向けたものと説明されており、具体的には、自分の目的や行動が「実現したい未来」に向けてどのように影響していくのかを考えたり振り返ったりすることと考えられる。さらに、田熊（2024）は、群馬県教育ビジョンの策定過程において、「エージェンシー」を一人一人の子どもたちが生まれつきもっている「より良くなろうと成長する力」であると述べている。これらのことから生徒が「実現したい未来」に向けて責任をもち、生まれつきもっている「エージェンシー」を発揮したり、高めたりすることが、VUCA な時代においても重要であると考えた。また、OECD は「ラーニング・コンパス」において、「エージェンシー」は生徒が未来を形作るために必要な「コンピテンシー」を育成するための基盤となると述べている（※筆者訳）。この「コンピテンシー」と類似した言葉として、文部科学省は「未来の創り手となるために必要な資質・能力」という言葉を用いており、日本の学校教育の中で重点を置き、育成を目指してきたものである。ここで奈須（2023）は、「学習指導要領等で用いられている「資質・能力」という言葉は、このコンピテンシーを訳出した行政用語であり、その本来意味するところは、未知のものも含め人生の中であるあらゆる問題場面に対し、効果的で創造的で倫理的にも適切な問題解決をその人らしく実行できる有能さである」と述べており、「資質・能力」と「コンピテンシー」の関係に触れながら、「資質・能力」があらゆる問題場面に対して、問題解決できる力であると示している。つまり、「エージェンシー」を発揮したり、高めたりすることが、「資質・能力」を育成するための基盤であり、この「資質・能力」

は VUCA な時代における様々な状況の答えのない課題に対応するために必要な力であることがわかる。

以上のことから生徒が各教科等の「資質・能力」を確実に身に付け、様々な状況の答えのない課題の解決に挑戦できることを目指す必要があると考え、研究主題を「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦する生徒の育成」と設定し、「エージェンシーの発揮」を副主題に設定した。

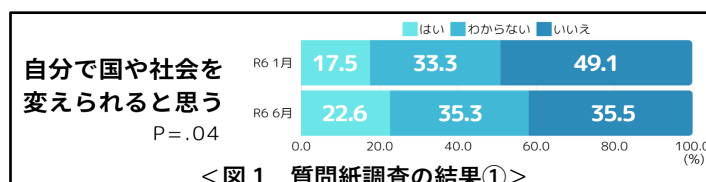
1.2 一年次の副主題設定の背景及び成果と課題

一年次の研究では、副主題を「エージェンシーを発揮し AAR サイクルを回す探究的な学びを通して」と設定した。「エージェンシーを発揮する」ことの必要性については前述のとおりである。ここで「AAR サイクル」とは、見通し・行動・振り返り（Anticipation - Action - Reflection）のサイクルのことであり、OECD の「ラーニング・コンパス」では、生徒に求められるコンピテンシー（資質・能力）を育んでいくのに必要なプロセスとして捉えられている。また、生徒が生涯にわたってコンピテンシー（資質・能力）を獲得していくための学習方略、学習プロセスとしても位置付けられている。このような学習プロセスを通して、生徒が自ら探究的に学べるようにしていくことが、様々な状況の答えのない課題にも挑戦し続けられる生徒の育成につながると考えた。

一年次の研究の成果として、自分で国や社会を変えられると思う生徒が増加し（図1）、学びが世界の自然環境の改善や景気の向上につながると考えて学習している生徒も増加した。学校外での学習についても学校での学習と同様の増加がみられることから、学校外の学習についても、学びに対する目的意識をもち、エージェンシーを発揮して取り組むようになったものと推察される。

研究の課題として、「自分は責任がある社会の一員だと思う」という項目に対して変化がなく、社会における変化や課題を自分の事として捉えられていない様子が見られたことが挙げられる。

また、研究一年次は意識調査を主として分析を行ったが、今年度は「エージェンシー」を発揮し、実現したい未来に対して責任をもって学ぶことが、資質・能力の育成にどのようにつながるかを分析していく必要があると考えた。



1.3 二年次の研究の方向性

研究一年次の主題である「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒」の育成を目指した背景は変わることはなく、今年度も目指すべき生徒の姿であると考え。今年度の主題も昨年度に引き続き「**実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒**」とした。

研究一年次の副主題にある「エージェンシーの発揮」や「AAR サイクルを回す探究的な学び」を実践する背景も変わってはいない。しかし、前述のとおり「エージェンシー」は生徒が未来を形作るために必要な「コンピテンシー」を育成するための基盤であることから、「エージェンシー」を発揮して、生徒のコンピテンシー（資質・能力）を育成することが目指すべき方向であると考え。ここで、「エージェンシー」と「コンピテンシー」の関連について、OECD の「コンセプト・ノート」を参照すると、「エージェンシー」と「コンピテンシー」は相互に強め合う関係であると推測することができる。そこで、中学校の実際の授業でも、「エージェンシー」と「コンピテンシー（資質・能力）」が相互に強め合う関係であると仮定し研究を進めることにした。また「AAR サイクル」は「エージェンシー」と「変革をもたらすコンピテンシー」の両方を育成する触媒とされており、「エージェンシーの発揮」や「コンピテンシー（資質・能力）」の向上と相互に強め合う関係の形成に欠かせないものであると考えた。そこで、研究一年次に手立てとしていた「AAR サイクル」には引き続き焦点を当て、「AAR サイクル」の各過程の質的充実も検討することとした。

Ⅲ 主題・副主題について

1 主題「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒」

まず「実現したい未来」とは、「よりよい社会と幸福な人生（図2）」だと考える。

生徒や我々が社会の一員である以上、平和で差別がなく経済的にも豊かであるなどの「よりよい社会」をつくらなければ、実現したい未来には到達できない。また、よりよい社会になったとしても、「自分はどのように生きていきたいか」という問いをもち、自己実現を果たしていこうとしなければ「幸福な人生」とは言えないだろう。つまり

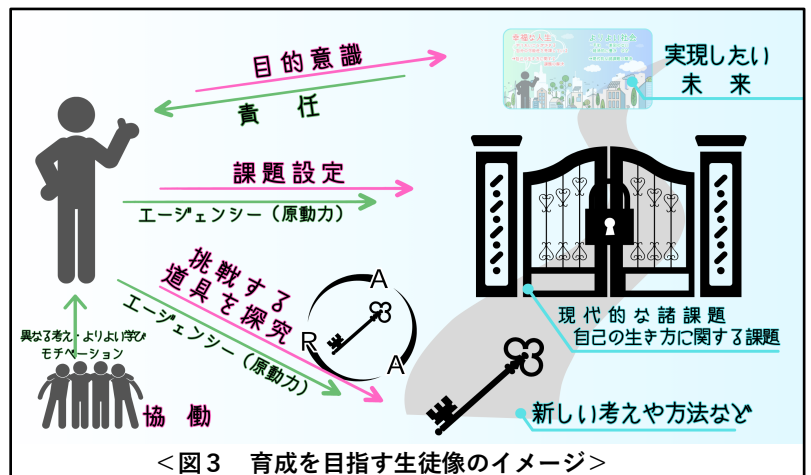


<図2 「実現したい未来」のイメージ>

「よりよい社会と幸福な人生」を両立させるためには、自己の生き方に関する課題や現代的な諸課題などを解決する必要があると考えた。例えば、生徒が自己実現を果たすために進路実現や将来の職業、自分自身の興味や関心などについて考え、自己実現において課題となる事柄を見だし、解決するための資質・能力を身に付けていくことは、幸福な人生につながっていくと考えた。また、現代的な諸課題を解決するために探究し、よりよい社会に向けて提案を行っていく中で身に付く実感を持った資質・能力は、よりよい社会を形成していくことにつながると考える。

次に、「責任をもって挑戦することができる生徒」の「責任」とは、前述の「実現したい未来」に向けた目的意識をもっている姿だと考える。具体的には、生徒が「実現したい未来に向けて、今、私たちは学ばなければならない」と責任をもって学んでいる姿である。また、このような姿は研究副主題にある「エージェンシーの発揮」を具体化した一つの姿であると捉えられる。

最後に、「挑戦することができる」とは、様々な状況の答えのない課題を解決していこうとする姿である。様々な状況の答えのない課題を解決していくためには、「自ら課題を設定できること」「課題解決を目指して新しい考えや方法などを探究できること」「他者と協働できること」が必要な条件であると考えた。昨年度より、「自ら課題を設定できること」「課題解決を目指して新しい考えや方法などを探究できること」に焦点を当てて研究を進めている。



<図3 育成を目指す生徒像のイメージ>

「自ら課題を設定できる」とは、実現したい未来に向けて「何」を探究するのかを見いだすことができる姿であると考え。世の中に存在する様々な事象に対して自ら課題を設定できるようになるために、各教科の授業を通して、自ら課題を設定する力を身に付けていく姿を想定している。

「課題解決を目指して新しい考えや方法などを探究できること」とは、目的意識をもって **AAR サイクル（見通し・行動・振り返り）** を回して学ぶことと捉えており、生徒が能動的に予測し、生徒の責任において行動に移し、予測に対する行動の結果を振り返るというプロセスであると考え。

以上を踏まえて、本研究における「目指す生徒像」の具体的な姿を示した。また、各教科等では以下のように「目指す生徒像」を設定し、研究を進めることとした。

— 本研究における「目指す生徒像」の具体的な姿 —

「実現したい未来」に向けて、生徒自身が「学ばなくてはならない」と責任をもち、様々な状況であっても自ら課題を設定し、課題解決を目指して、見通し・行動・振り返りを行いながら自分で何をどのように学ぶのかをデザインしながら探究していく生徒

教 科	各教科等における「目指す生徒像」
国 語	「本質的な問い」を基に探究をデザインして、自分の考えを広げたり深めたりする生徒
社 会	平和で民主的な考えから、実現したい未来を切り拓く生徒
数 学	数学と実社会を結び付けて自ら探究し続ける生徒
理 科	自然事象から課題を設定し、自ら科学的に探究する生徒
音 楽	自身と社会と音楽の関係を探究し、自己を確立し続ける生徒
美 術	美術と社会の関わりについて探究し、新たな価値を創造することができる生徒
保健体育	運動やスポーツを多様な関わり方で楽しみ、心的エネルギーを獲得できる生徒
技術・家庭	生活や社会を見つめ、理想とする姿に向けて工夫し創造する生徒
英 語	よりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒
道 徳	道徳的課題を自分事化して捉え、自己のよりよい生き方を考え続ける生徒
未来創造科	社会と関わり合いながら探究し、「実現したい未来」を創造する生徒

2 副主題「エージェンシーを発揮し、生徒自身がデザインした探究的な学びを通して」

「エージェンシー」の定義について、OECD（2019）は1章で示した内容に加え、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」であると述べている。また、群馬県教育委員会はエージェンシーを「人が誰しも生まれついて持っている自分と社会をより良くしようと願う意志、原動力」であると述べている。これらを踏まえて中学校教育における「エージェンシー」を、本校では「実現したい未来に向けて責任をもつことができているとき、発揮される『原動力』」として捉え、研究を進める。

「生徒自身がデザインした」については、中央教育審議会諮問（2024）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では、子供たちにとって重要なこととして「自らの人生を舵取りする力を身につけること」が示されている。生徒が自らの人生を舵取りできるようになるためには、義務教育の段階であっても、「何を学ぶのか」や「どのように学ぶのか」ということを自身で決めることが必要であると考えた。そこで、各教科等で生徒が何をどのように学ぶのかを検討している場面等を「生徒自身がデザインした」と捉えることとした。

「探究的な学び」について、中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編や特別の教科道徳編、理科編などでは、「探究」について多少の文言の違いはあるものの、一連の学習過程を経て新しい考えや方法などを生み出すという意味の言葉として扱っている。また白井（2025）は、「探究を進めていくうえで不可欠なのは方法論である」と述べており、方法論としての学習過程（総合的な学習の時間では、①課題の設定→情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現が学習過程として示されている）の重要性を指摘している。本校では、平成31年度の研究において、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善に向けて、各教科等の学習過程を示している。改めてこの学習過程を再考し、エージェンシーを高め発揮させる学習過程や各教科等を学ぶ意義について振り返り、授業を実践することが、探究的な学びにつながり、生徒の資質・能力の育成につながると考える。

IV 本研究の研究計画

研究一年次には、生徒が学習の中で困難を感じていた「課題の設定」に焦点を当てて手立てを講じ、「AAR サイクル」を授業内でどう回していくのかということに留まり、「AAR サイクル」の各過程の質について検討されてこなかった。そこで、「エージェンシーの発揮」を前提としつつ、AAR サイクルの各過程を研究年次ごとに重点を置き、計画的に研究を進めることで、生徒の資質・能力の育成に向けた提案としたい（表1）。

〈表1 三年間の研究計画と各年の手立て及び成果の測り方〉

重点とする AAR サイクル の各過程	各教科等における研究の具体的な手立て	研究成果の測り方	研究年次
Anticipation 見通し	(1) 生徒が自ら課題を設定できるようにするための手立て (2) エージェンシーを発揮して AAR サイクルを回すための手立て	エージェンシーの発揮や高まりについての意識調査	一年次
Action 行動	(1) エージェンシーを発揮し、各教科等の本質に迫る学習過程の再検討 (2) 生徒自身が探究的な学びをデザインするための手立て	エージェンシーの高まりにより、どのような資質・能力が育成されたかを分析	二年次 (本年)
Reflection 振り返り	(1) 未定 (2) 未定	エージェンシーと資質・能力が高め合い、どのような生徒を育成することができたかを分析	三年次 (最終)

研究一年次は、まずは AAR サイクルを生徒が回していくための手立てや「自ら課題を設定できるようにする」など、AAR サイクルの「Anticipation（見通し）」に特に重点を置いて研究を進めた。成果として、「自分で国や社会を変えられる」「日本の将来がよくなる」「学びが日本や世界の将来につながる」という意識の向上が見られた。これは、「何のために学ぶのか」「この学習にどんな意味があるのか」などの学びに対する目的意識をもつことにつながり、「実現したい未来」に対して責任をもって学ぶことができたかと推察する。

研究二年次には、研究一年次に得られたエージェンシーの高まりが、資質・能力の向上にどのようなつながったかを分析していく。2章で述べたとおり、エージェンシーとコンピテンシー（資質・能力）は互いに強め合う関係であると仮定している。生徒が「実現したい未来」に向かうために、生徒の資質・能力がどのように高まったのかを分析し、エージェンシーとコンピテンシー（資質・能力）の相乗的に高め合っていることを明らかにしていきたい。さらに、研究二年次では、AAR サイクルの「行動（Action）」の過程に重点を置いて手立てを講じる。「行動」は、見通しを持ったことについて行動に移すことや課題を解決するための行動と捉えることができる。これを各教科等の授業に当てはめて考えた際に、エージェンシーを発揮しながら各教科等の本質に迫り、生徒自身が探究的な学びをデザインすることが重要だと捉えている。以上を研究二年次の手立てとして研究を進める。

研究最終年次（三年次）には、「振り返り（Reflection）」に重点を置く。研究一年次、二年次で行ってきた「課題の設定」や「探究的な学びのデザイン」をどのような視点で評価し、どのように未来につなげていくのかを生徒自身が振り返ることで、生徒のエージェンシーがさらに高まり、未来創造科（総合的な学習の時間）や各教科等の授業を通して、どのような生徒が育成できたかを量的及び質的に分析を行っていく。手立てについては、研究二年次の総括を踏まえて検討していきたい。

V 本研究における具体的な手立て

1 具体的な手立て

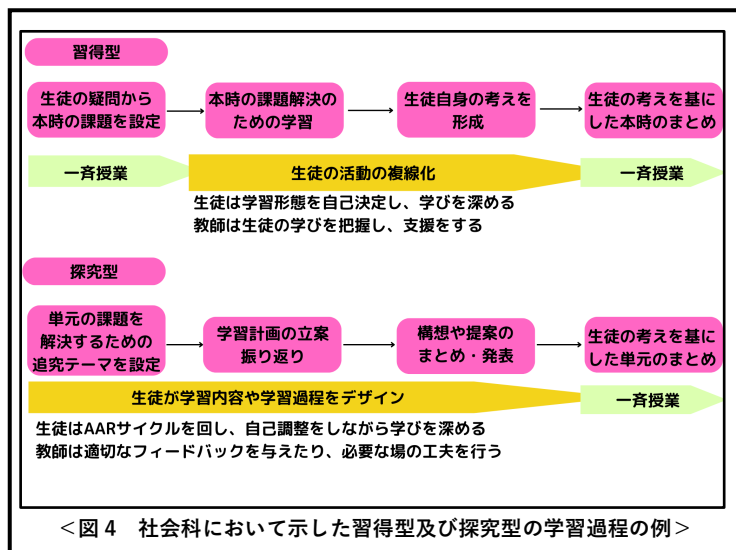
1.1 手立て① エージェンシーを発揮し、各教科等の本質に迫る学習過程の再検討

AAR サイクルの「行動 (Action)」は、課題を解決するための行動として捉えることができるため、各教科等で示されている課題解決に向けた「学習過程」が重要だと考える。また、学習過程は、現行学習指導要領改定の重点であった「どのように学ぶのか」を各教科等で具体化したものと捉えることができ、各教科等の本質に向かうものだと考えている。この学習過程を「エージェンシーの発揮」の視点から再検討することで、生徒が各教科等を学ぶ本質的な意義を捉え、「この教科の学びは、よりよい社会や幸福な人生につながる。私たちは、今学ばなければならない」と実現したい未来に対して責任をもちながら学ぶことができるようになると考えた。各教科等の部会では、自身の教科の学習過程が各教科等の本質に迫っているか、どの過程が生徒のエージェンシーを発揮するために有効なのかという視点から再検討し、学習過程を生徒と共有したり、ワークシートを工夫したりするなどの手立てを講じた。このような手立てを通じて、生徒がエージェンシーを高めながら、どのように資質・能力を高めていったかを分析することとした。

以下の表は本校の教科部が考える「実現したい未来に向けて、各教科等を学ぶ本質的な意義」の例である。本校では各教科において以下に示した学ぶ意義を生徒が実感し、エージェンシーを発揮しながら学ぶことを目指した。また、それらを具体化するために単元計画を俯瞰し、学習過程を再検討して実践研究を行った。

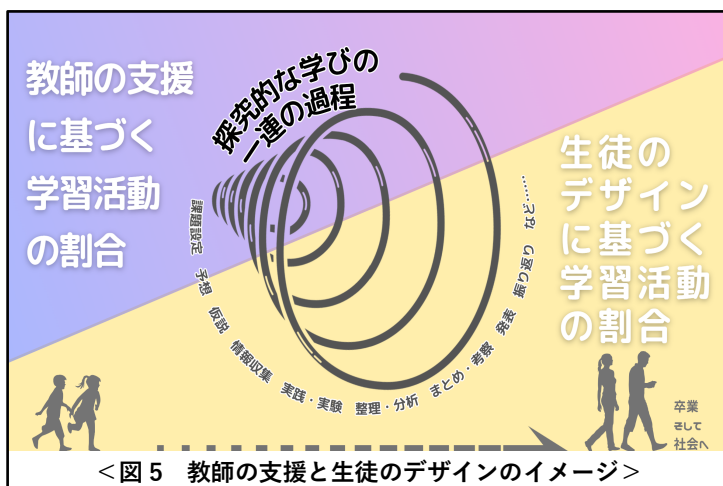
教科	実現したい未来に向けて、各教科等を学ぶ本質的な意義の例
国語	言葉の働きを「読むこと」「話すこと・聞くこと」「書くこと」に関連付けながら発揮することで、国語を適切に表現し正確に理解することができるようになる。
社会	社会的事象を多面的・多角的に考察・構想することで、これからの社会のあり方や自身の生き方について考えることができるようになる。
数学	事象を、数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えることで、問題を解決することができるようになる。
理科	自然の事物・現象に親しみ、科学的な概念を働かせることで、科学的に探究することができるようになり、自然と人間が調和した社会をつくることができるようになる。
音楽	日本や世界の多様な音楽文化に触れ、そのよさや美しさを味わったり、思いや意図をもって表現を工夫したりすることで、自己表現の仕方を見つけたり、豊かな心を育んだりすることができるようになる。
美術	表現活動や鑑賞において多様な価値観を尊重しながら自己と他者を理解し、創造的に社会と関わることで、自らの感情や価値観をみつめ、豊かな自己を形成し、他者と共によりよい未来を築くことができるようになる。
保健体育	運動やスポーツへの多様な関わりの中で、成功体験を積み重ね楽しさを実感することで、生涯にわたって健康に生きることができるようになる。
技術・家庭	生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、生活の中にある問題を見だし、解決に向けて考え行動する力を身に付けることで、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて生活を工夫し創造することができるようになる。
英語	異なる立場や文化、考え方を尊重しながらコミュニケーションを図る資質・能力を育成することで、自分の考えを深めたり、相手の共感や関心を得たりしながら、共によりよい未来を創り上げることができるようになる。

例えば、社会科では、単元計画を俯瞰しながら学習過程を再検討した。単元計画の中で知識及び技能や思考力、判断力、表現力等の資質・能力をいつどのようなタイミングで育成するかを教師が構想した。学習過程を再検討する中で、本校社会科部では、「習得型」と「探究型」という学習過程を設けることが、生徒のエージェンシーを発揮するとともに、社会科の本質的な学びにつながると考えた（図4）。習得型では、社会科における基礎的な知識や学ぶべき視点を生徒は身に付けていく。具体的には、地理分野で学ぶべき視点として、「地形」「気候」「産業」「そこに住む人々の暮らし」などを習得し、他の地方の学びに生かしくことが想定できる。探究型では、習得型で得た知識や視点を活用しながら、学習内容や学習過程を自己調整しながら学びを深めていく。その中で生徒は社会科での学びが実際の社会でどのように役立つのかを見通したり、自分はこれからの社会でどのように生きていくのかを考えたりして、エージェンシーを発揮していくことができると考えた。さらに習得型と探究型を単元計画の中でどのように配置し、生徒がどのように学んだらよいかを教師が熟慮することが生徒の資質・能力の育成に大きく関わると考えている。



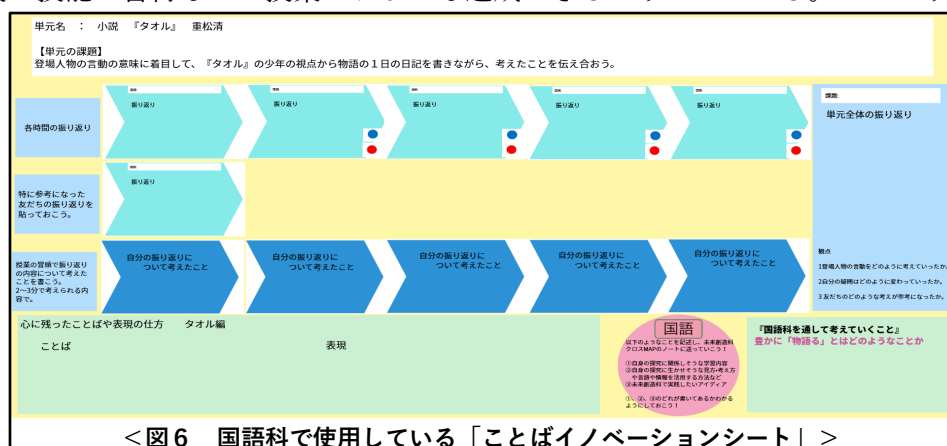
1.2 手立て② 生徒自身が探究的な学びをデザインするための手立て

昨年度は「課題の明確化」を手立てとし、生徒が「何を学ぶのか」「何を探究するのか」という課題を生徒自らが設定できるようになることを目指した。「課題の明確化」という手立てによって生徒のエージェンシーの高まっていることが、意識調査から明らかになっている。しかし、社会における変化や課題を自分の事として捉えられていないことが研究の課題として挙げられた。また意識調査の中で、「生徒主導」の授業が微増に留まり、更なる充実が課題となっている。そこで今年度は、生徒が学びをより自分事化し、自分で行動を起こすことに重点を当てる。これは、AARサイクルの「Action（行動）」とも捉えられる。これを各教科等の授業内で実践していくためには、生徒が自分自身で「何をどのように学ぶのか」をデザインする学習活動の割合を増やしていくことが重要だと考え、手立てとして設定した（図5）。このような手立てを通して、生徒が実現したい未来に向けて、自らの人生を舵取りする力などの資質・能力がどのように育成されたかを分析したい。



例えば、国語科では、生徒自身が探究的な学びをデザインするために、「ことばイノベーションシート」を活用している（図6）。このシートを活用することで、生徒が「今、自分は何をしたらいいのか」

を国語における本質的な問いから導き出し、生徒自身が教科の本質を見失うことなく「何をどのように学んだらよいか」を考えられるようにしている。また、国語科における語彙の習得にもこのシートを活用しており、知識及び技能の習得などの授業のねらいも達成できるようにしている。このように生徒が自分自身で学びをデザインしながら、教師が育成を目指す資質・能力が生徒に身に付けられることを重点において、各教科等でワークシート等の作成や手立ての構想を行い、実践している。



＜図6 国語科で使用している「ことばイノベーションシート」＞

3 各教科等の手立て

各教科等における目指す生徒像に迫るための具体的な手立てとして、今年度は「エージェンシーを発揮し、各教科等の本質に迫る学習過程の再検討」を手立て（1）として示し、「生徒自身が探究的な学びをデザインするための手立て」を手立て（2）として設定した。各教科等の手立ては以下の通りである。

教科	生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びを実現するための具体的な手立て
国語	(1) 「本質的な問い」を問い続けていく学習過程 (2) 振り返りの質を高めながら「本質的な問い」について考える「ことばイノベーションシート」
社会	(1) 実現したい未来と学習内容を関連付ける単元構成と「習得型」、「探究型」を用いた授業デザイン (2) 「探究マップ」を用いた授業デザイン
数学	(1) 「数学の学習過程」の共有 (2) 探究的な学びをデザインするための「疑問解決タイム」
理科	(1) 生徒が探究の見通しを持つことができるようにするための導入場面での事象提示の工夫 (2) 生徒が自ら探究の進め方をデザインする学習活動の実施
音楽	(1) 題材と題材をつなぐ題材配列の工夫 (2) 場面から課題設定する「ミュージッキングカード」の活用
美術	(1) 美術と社会の関わりを探究するための「アート＆ライフタイム」の設定 (2) 題材全体を見通し、自己決定、自己調整を促す探究シートの活用
保健体育	(1) 自己の課題を解決するためのAARサイクルを促すOPP（One Page Portfolio）の活用 (2) 学習に見通しをもち取り組むための「学習の手引き」の作成
技術・家庭	(1) 自分事化して課題解決するための学習過程 (2) 課題解決に向けた「My Project シート」の活用
英語	(1) 追究する過程における「Transable」を用いた英語の適切な表現選択に対する支援 (2) 「新附中 Can-Do シート ver2」の活用による単元目標達成に向けた学びのデザイン
道徳	(1) 5つの学習過程 (2) 対話を活性化させる意見表出ツールの活用
未来創造科	(1) 社会とのつながりの中で探究をする地域ネットワークの活用 (2) 生徒が自らの探究的な学びをデザインする「未来創造 Day」と各教科等の学びをつなぐ未来創造科クロス MAP の活用 (3) 生徒がエージェンシーを発揮する探究成果発信の場の充実

VI 研究のまとめ

1 研究の成果と課題

本研究では、実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成を目指した。そのための手立てとして「エージェンシーを発揮し、各教科等の本質に迫る学習過程の再検討」と「生徒自身が探究的な学びをデザインするための手立て」を各教科等で講じ、実践を行った。各教科等の手立てにおける実践例、成果と課題については各教科等の頁を参照されたい。ここでは、各教科等で表れた姿を総括して論じることとする。

「エージェンシーを発揮し、各教科等の本質に迫る学習過程の再検討」の成果としては、各教科等で学習過程を再検討したことにより、生徒が自らの学習過程を意識し、「今どの位置にいるのか」「次に何をすべきか」という見通しをもって取り組む姿が見られた。また、次の活動や課題設定へとつなげようとする態度が向上している様子も見られた。さらに「実現したい未来」を意識し、生徒は、獲得した知識や経験を次の課題に応用するだけでなく、将来の社会や自らの生き方に結び付けて考えようとするようになった。その中で、「自分はまだ十分にできていないから次にこうしたい」という自覚的な記述や発言が増加しており、実現したい未来への展望をもって再検討を行う姿勢が育ちつつあることが明らかになった。こうした姿から、学習を現在のためだけに捉えるのではなく、実現したい未来に向けて責任をもち、各教科等を学ぶ意義を感じながら、資質・能力を高めていることができたことと捉えている。「生徒自身が探究的な学びをデザインするための手立て」の成果としては、課題の設定から解決に至るまでを自分事としてデザインし、行動に移す姿が多く見られた。生徒は「何を」「どのように」学ぶのかを自ら選び取り、仲間と対話したり、個別に学びを進めたりしながら探究的な学びを進めていた。また、状況に応じて柔軟に学びを調整する姿も見られた。当初の計画をそのまま進めるのではなく、学習の進展や新たな気づきに基づき、方法を見直したり視点を追加したりする様子が多く見られた。

課題としては、振り返りの内容が「できた」「できなかった」といった事実の確認にとどまりやすい傾向が見られた。また、自分の行動の結果が次の学びや日常生活にどのような影響を与えているかまで振り返られている教科もあったが十分ではない様子があった。さらに、自分自身が学びを通してどのような資質・能力が身に付いたかなどについても十分に触れられていない点が挙げられる。

2 今後の展望

以上の成果と課題を踏まえ、次年度の研究では AAR サイクルの「Reflection（振り返り）」に焦点を当て、その質をどのように高めていくかが重要な課題であると考えた。生徒が「実現したい未来」を見据えながら、自分自身にどのような資質・能力が身に付いたかを振り返り、自らの生活につなげていこうとすることが重要だと考えた。また、生徒が「自分にどのような力が身に付いたか」「自分は何ができるようになったのか」を自覚しながら学び続けることは、学校教育を離れ、予測困難な社会を生きる上で重要なことであると考えている。次年度はこれらを達成するための手立てを講じ、研究を進めたい。今後も研鑽を積み、諸先生方のご指導、ご助言を賜りながら更に研究と実践を重ねていき、未来を創る生徒の育成を目指していきたい。

（櫻井 康之）

<参考文献>

- 中央教育審議会（2024）『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）』．
- 群馬県教育委員会（2024）『群馬県教育ビジョン（群馬県第4期教育振興基本計画）』．
- 群馬県教育委員会（2024）『エージェンシーを発揮するための学びを推進するリーフレット』．
- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説（総則編・理科編・道徳編・総合的な学習の時間編）』，東山書房．
- 文部科学省（2023）『教育振興基本計画』．
- 御手洗明・赤塚祐哉・井上志音（2023）『国際バカロレア教育に学ぶ授業改善』，北大路書房．
- 中山芳一（2023）『教師のための「非認知能力」の育て方』，明治図書出版．
- 奈須正裕（2023）『コンピテンシー・ベースの教育と教科内容研究への期待』，日本教科内容学会誌，第9巻，第1号．
- OECD（2019）『OECD Learning Compass Concept Notes』．
- 白井俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』，ミネルヴァ書房．
- 白井俊（2025）『世界の教育はどこに向かうのか』，中公新書．